2007年9月刊行

建築家ガウディ全語録

編・訳・注解
鳥居 徳敏

B 5 判上製函入　本文 660 ページ　図版 409 点
定価 37,800 円（本体価 36,000 円）
ISBN978-4-8055-0554-0
中央公論美術出版

目　次

まえがき
凡例／参考文献、および同略号

第１部　ガウディ全文録
第１章　修学時代
（番外）洗礼記録
1. 中等教育時代
2. バルセロナ文学大学科学学部時代
3. 県立バルセロナ建築学校校長への申請書
4. レウス市立博物館所蔵メモ
注解Ⅰ　ガウディの学業成績
第２章　ガウディ・ノート
1. ガウディ日記
2.『ロラン、マドリード』
注解Ⅱ　ガウディのデザイン・ソース
——ロラン写真集発注用メモ——
3. 装飾に関する覚書
第３章　修学以降の文書資料
1. レウス市立博物館所蔵メモ
2. プラガマンス計画案
3. バルセロナ市街灯
4. カタルーニャ建築家協会への入会
5. 国内労働促進協会での装飾美術展
6. ティモテウ・パドロスへの書簡
7. ホセ・ビダールへの書簡
8. バルセロナ市庁舎大階段と市議会「百人会議室」修復工事計画に関わる書簡、見積り、および報酬
9. アストルガ司教館関連
10. バルセロナ市長への感謝状
11. セルト作ビック大聖堂装飾用下絵に関する答申
12. ジュゼップ・マリア・マニックへの書簡
13. ジュアン・マラガイへの書簡
14. ジュゼップ・ピン・イ・スレールへの書簡
15. アントニ・ルビオー・イ・リュックへの書簡
16. ドゥメナク・スグラーニャスに対する保証書
17. カサ・ミラの竣工に関わる証明書
18. ジュゼップ・カナレータへの書簡
19. ジュゼップ・トーラス・イ・バジャスへの書簡
20. マンレッサ教会堂修復に関する所見
21. サグラダ・ファミリア贖罪聖堂：埋葬を目的とした地下礼拝堂計画
22. 両親の供養基金申請書
（番外）死亡記録

第２部　ガウディ語録
第１章　バルゴス収集語録
『ジュアン・バルゴスのガウディとの会話』
第２章　マルティネイ収集語録
『ガウディ自身が語るサグラダ・ファミリア聖堂』
第３章　その他のガウディ語録
第４章　プッチ・ブアーダ収集語録
『ガウディの思想』

あとがき／索引

編訳者のことば

研究は単なる自己満足ではなく、多少なりとも社会に寄与することを目指す必要がある。ガウディ研究の社会への貢献となれば、先ずは正しい情報の発信がその基礎となろう。なぜなら、正しい情報こそが、真実のガウディに一歩でも近づけることのできる最善の道であり、真実のガウディから学ぶべきものを学んでこそ、人々の有益であろうと考えるからである。特に作品の多くが世界遺産に登録され、マスメディアで頻繁に取り上げられている今日、ガウディ建築は専門領域の枠を超え、幅広く一般にも影響を与える存在になっている。高校の美術教材では2頁見開きで扱われ、歴史の教科書の表紙を飾るガウディ建築。この意味で、歴史上の建築のなかでもっとも影響力を持つ建築のひとつになっていることは間違いないのである。

おそらく本書のような第一次資料集出版の最大の目的は、ガウディ自身が書き記し、語り述べた言葉を日本人なら誰しも手の届く存在にすることにあろう。これにより、誤った風説や伝聞、根拠のない思い込みや偏見が多少なりとも減少することを願うからであり、より真実に近いガウディに接近することが可能となり、より正確なガウディのメッセージを受け取り、ガウディから多くを学ぶことを期待できると思うからである。

（あとがきより）

本書の構成

■第１部は消失を免れたガウディ直筆の文書を建築家の資格を取得するまでの修学時代と、それ以降の文書類 26 種類、全 66 文書であり、番外として洗礼記録と死亡記録を挿入した。また生まれ故郷レウスの博物館に残されたノートについては別に１章をもうけ、記述年代順に収録する。

■本書の総合的理解を目的として、編訳者による２編の論考を収録、「注解Ⅰ　ガウディの学業成績」では資料不足でこれまで曖昧にされてきたガウディの学業成績を全面的にチェックし、当時の学生の社会的地位などを考慮しながら、学生時代のガウディをどう評価すべきかを再検討する。「注解Ⅱ　ガウディのデザイン・ソース」では第１部第２章「２．『ロラン、マドリード』」に記される写真資料のメモを詳細に分析する。これは19世紀後半にフランス人写真家ジャン・ロランによって撮影された写真についての覚書であり、ガウディ建築のデザイン・ソースのひとつとして受け取れるものである。併せてガウディが書き残したロランの写真のうち、現存する162点を掲載する。

■第２部はガウディの生前を知る、ジュアン・バルゴス・マソー（1894-1974）、セザル・マルティネイ・イ・ブルネー（1888-1973）の著作に遺された全語録に加えて、ガウディ生前に新聞や雑誌記事などに出現したコメント類なども新たに収集した。

■本書では第１部第２部とも編訳者による詳細な注を付し、また巻末に索引を入れた。

⇨本文版面見本（35％縮小）

図270　ガウディ：アストルガ司教館（1889年着工）、毎週バルセロナに送られた建設状況写真の１枚

添付したこの報酬請求書を宗法務省大臣閣下[7]に御送付される際には、議論の余地ない明晰さと周知の功徳の証として、相応しいものの価値を認めることができるであろう同大臣閣下に先立ち、猊下のお考えを述べられることをお願いし、そうされんことを御期待申し上げます。

敬具［神が猊下にご長命を授かりますように］

アストルガ、1892年11月21日

アントニオ・ガウディ・イ・コルネート

アストルガ司教猊下殿

司教区聖堂修繕委員会委員長（アストルガ）

9．3．1893年11月4日付辞任願い

拝啓［猊下殿］

私の尊敬する友人である当司教区の亡き高位聖職者ファン・バウティスタ・グラウ博士猊下とこの筆を取るものとの間にあった考え方と判断基準の完全なる一致が現在存在しないことに鑑み、またそうした状況は当市司教館の建設を無事完成させるために本質的かつ不可欠の条件と考え、同建設の主任建築家職からの辞任を、現行法に従い、同建設工事に支障が出ぬよう適切な処理がなされるべく、宗法務省大臣閣下に伝えてくださるよう、司教区委員会委員長としての猊下の手

に委ねざるを得ないことを申し上げます。[9]

レオン、1893年11月4日[10]

アントニオ・ガウディ・イ・コルネート

司教代理猊下

アストルガ司教区聖堂修繕司教区委員会委員長殿

注

(1)　アストルガはスペイン北西部のレオン県に位置し、古代ローマの城壁を持つ古都だが、カタルーニャとは縁遠く、元来ガウディとは無縁の地域である。この地にガウディと同郷のレウス出身のグラウ Joan Baptista Grau Vallespinós（1832-1893）神父が1886年に司教に就任するが、その12月司教館が火災焼失する。教会建築は一般に司教区建築家が担当する。この司教区建築家がアストルガには不在であった。そこで1887年2月グラウ神父は司教館再建をクラゴーナでの仕事（旧イエス・マリア学院付属教会堂1878-82）でも知り合いになっていたガウディに依頼する。したがって、司教の個人的な関係から生まれた仕事であり、血縁とか地縁は全くなかった。それ故、司教が急死すると、ガウディの擁護者がなくなり、後続資料の辞任書の提出となった。また当時のスペインは立憲君主制の時代で、教会と政府は緊密な関係にあり、後者が前者の財政的援助をしていた。この司教館再建でも教会や地元による資金調達ではなく、政府財源での建設になった。再建計画案はマドリードの王立サン・フェルナンド美術アカデミーの承認を必要とし、この承認を前提として政府が建設費を負担した。したがって、全ての書類はカスティーリャ語が裏務付けられ、現存する資料も全てスペイン語で書かれている。アストルガ司教館古文書室所蔵の9．2．と9．3．の書簡は、ルエンゴ（Luengo, Alonso: *Gaudí en Astorga*, Astorga, 1954）により掲載される。アロンソ・ガベーラ（Alonso-1972, 1983, pp.45-6）はほぼ全文、メルカデル（Mercader-2002, pp.207-11）は全文を再録。

(2)　この断片はラフルスにより掲載された（Ráfols-1929, p.58）。日付の掲載はなかったが、最初のガウディ研究書の準備メモ（ガウディ記念講座所蔵：Ráfols-1928, p.51）では、1887年2月8日の記載が見られる。同準備メモにはその他４通の司教宛ガウディ書簡の存在が記されている。内容は、着工前にアストルガに行けないことから、設計に必要な資料提供（例えば建設予定地の状況、地元の施工方法、値段など）を求めるものであった。

(3)　これは司教からの質問に答える部分だが、「人造石」が何を意味するかは不明である。なぜなら、当時のアストルガで「人造石」らしきものの使用が認められていないからある。アロンソ・ガベーラ（Alonso-1972, pp.29-30; 1983, pp.31-2）参照。

(4)　この質問書は司教からの質問書ではなく、ガウディが司教に送った質問書であり、その返答を待っているものと思われる。

(5)　フィンカ・グエルの邸宅での出来事であろう。この18世紀の邸宅は父ファン・グエル（【カ】ジュアン・グエイ Juan Güell Ferrer 1800-73）が広大な当歌地を購入したとき存在したもので、ガウディにより部分的に改造されたが、新築ではない。アントニオ・ロペス Antonio López López（1817-83）とは、初代コミーリャス侯爵のことであり、その長女イサベルがアウセビ・グエイの妻である。また、手紙の事件を契機に、グエル館（【カ】パラウ・グエイ 1886-90）では暖房・換気システムを導入する。このシステムから、屋上に多数の煙突・換気塔造形が出現する。

(6)　司教館再建関係資料（アストルガ司教館古文書室、資料 No.444、1889年10月1日　1893年7月

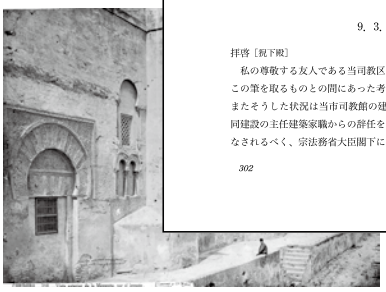


図134　（T-80）コルドバ、大メスキータ［モスク］、東側外観　（I.P.H.E.）

図136　（T-83）セビーリャ、トリアーナからの市街全景　（I.P.H.E.）

図135　（T-82）コルドバ、大メスキータ［モスク］、内観　（I.P.H.E.）

図137　（T-84）セビーリャ、大聖堂、アルカサル（王宮）から撮影した全景　（I.P.H.E.）

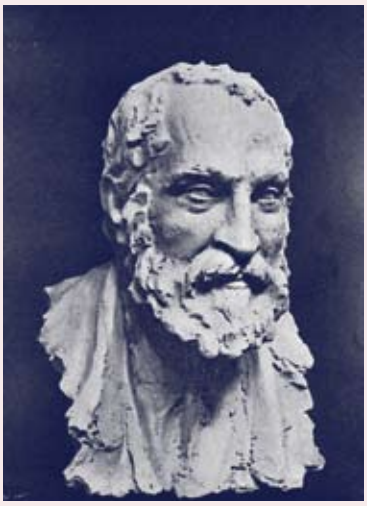
⇦本文版面見本（35％縮小）

世界の建築史上、建築家アントニ・ガウディの存在ほどその建築意匠・構想が、独創的かつ秘密に満ちた建築家はいない。そのため後世、様々な解釈とガウディ像の創出がなされてきたが、その本質はますます謎を深めるばかりである。本書は、焼失を免れ現存する全てのガウディ直筆の文章に、洗礼記録と死亡記録の公文書や、周囲の人間が記録したコメントや会話を網羅・収集し、詳細な注を加えた、ガウディ初の全語録の公刊である。ガウディがそのメモに遺した、当時のスペインの建築・風景・美術写真集を調査し、スペインの歴史遺産写真資料館に残る162点のこれらの写真資料図版も掲載、ドキュメントと映像資料によって語られるガウディ自身の「まなざし」を蘇らせた。編訳者による2篇の解題論稿を併載する。

アントニ・ガウディ（一八五二―一九二六）

スペインの建築家。バルセロナで建築教育を受け、ゴシックとイスラム組積造の伝統を発展させ、自由な架構、自然の有機性に鼓吹された曲面曲線に富んだ独自のアール・ヌーヴォー様式を生み出した。代表作はカサ・ビセンス（一八八三―八五）、パラシオ・グエル（一八八六―九〇）、コローニア・グエル教会堂（一八九八―一九一四）、グエル公園（一九〇〇―一四）、カサ・バトリョ（一九〇五―〇七）カサ・ミラ（一九〇六―一〇）など。一八八三年以来サクラダ・ファミリア聖堂の主任建築家となり、東袖廊外側を建てたが、交通事故による死によって未完に終わった。しかし、未完ながら詳細な模型が遺されており、現在も工事中である。

（新潮社『世界美術辞典』より抜粋、ただし一部修正）



⇦アントニ・ガウディ、デスマスク

編訳者略歴

鳥居 徳敏（とりい・とくとし）

一九四七年生まれ。一九七三から八四年にかけてスペイン留学、スペイン建築史、およびガウディ建築研究に従事する。一九八三年にスペイン王立アカデミー統合機関「スペイン学術院」より研究成果として El mundo enigmático de Gaudí が出版される。一九九四年博士論文『ガウディ建築の組成論的研究』にて工学博士号取得（名古屋工業大学）。二〇〇〇年より神奈川大学経営学部教授。

［主要著書］

El mundo enigmático de Gaudí, Madrid; Instituto de España,1983

『アントニオ・ガウディ』鹿島出版会、一九八五年

『ガウディの建築』鹿島出版会、一九八七年

『ガウディの七つの主張』鹿島出版会、一九九〇年

『建築家ガウディ―その歴史的世界と作品』中央公論美術出版、二〇〇〇年

『ガウディ建築のルーツ―造形の源泉からガウディによる多変換後の最終造形まで』鹿島出版会、二〇〇一年

Gaudí 2002 Miscelánea, Barcelona; Ayuntamiento/Planeta, 2002（共著）

『ガウディ、かたちの探求』東京都現代美術館―読売新聞、二〇〇三年（共著、翻訳・監修）

お取扱いは

中央公論美術出版

http://www.chukobi.co.jp

〒104-0031　東京都中央区京橋 2-8-7

TEL03-3561-5993　FAX03-3561-5834